

ロサリオ・カステリャノス  
『バルン・カナン——九人の神々の住む処——』

(田中敬一訳 行路社 2002年 333頁)

片 倉 充 造

「メキシコ革命」を主題にしたいわゆる“メキシコ革命小説”の起点は、一般には、マリアノ・アスエラ（1873～1952）の「虐げられし人々」（*Los de abajo* 1916、高見英一訳『第三世界からの証言』学藝書林昭和45年）にまで遡ることができる。主人公デメトリオ・マシアスが歴史の胎動に乗じて農夫から革命派のわか將軍へと転身する、文学的価値の高い良品であった。1920年代以降、「メキシコ革命」は、紛争から社会建設のプログラムを具現化する時期を迎えるが、別けてもラサロ・カルデナス大統領期（1934～40）は、ナショナリズムが高揚し、改革事業が最も進捗した時代である。“革命小説”の分野でも、戦乱期の英雄ドゥランゴ州のパンチョ・ビジャ（1877～1923）やモレロス州のエミリアノ・サパタ（1879～1919）が諸作品の題材となったように、同期は、グレゴリオ・ロペス・イ・フエンテス（1897～1966）による、先住民問題の解決策を模索した『インディオ』（1935）や石油産業接収をテーマにした『ウアステカ』（1939）等にも、格好の時代背景を提供している。「革命」が収束した40年代以降、さらにインディオ文化を体系的に理解し、また文学的芸術性にも向上したりカルド・ポサス（人類学者1912～）『フアン・ペレス・ホロテ』（*Juan Pérez Jolote* 1949、清水透共著『コーラを聖なる水に変えた人々』現代企画室1984）やロサリオ・カステリャノス（1925～74）他の小説が登場する。とりわけこの両者の作品の読み合わせは、その「時代性」を把握するに有効であろう。こうした“メキシコ革命小説”のジャンルは、後年、カルロス・フエンテス（1928～）『古いぼれグリンゴ』（*Gringo Viejo* 1985、安藤哲行訳集英社文庫1994）やラウラ・エスキヴェル（1950～）『赤い薔薇ソースの伝説』（*Como agua para chocolate* 1990、西村英一郎訳世界文化社1993）にも継承されていると言ってよい。

それでは表題書の作品世界について言及したい。時代は、まさに1930年代のカルデナス期。また舞台はメキシコ合衆国南端、グアテマラ国境にも程近いチアパス州であり、首都メキシコシティに伍して、コミタン、トゥクストラ、サンクリストバル、オコシゴなどの地名もふんだんに登場する。そして語りを中心は、7歳の少女“わたし”であるため、本文は、主に〈です／ます調〉で表現され、文体の滑らかさ・柔らかさが醸し出されている。先住民の生活文化についての説明注も数多く付され、訳者の読書への配慮は、細心と言えるだろう。

構成は、1部24章、2部18章そして3部24章全326頁（原文では、Balún Canán, 290頁）であり、題名“バルン・カナン”とは、マヤ語で“9人の神様”（1部第8章）を意味する。カル

デナスが「学校」と「道路」の建設、すなわち、スペイン語教育とそれに即応した生活様式の普及により、インディオをメキシコ人として包括する《国民統合政策》を推進したことは歴史的事実だが、本作品中、急遽若者エルネストを1925年の教育改革で設置された“農村教師”に任命しやがて破綻した農園主セサルの混乱ぶりは、中央政府（共和国大統領）の権力を最も如実に象徴している場面であると思われる。ちなみに翻訳書の表紙は、著名な「革命」壁画家の一人ディエゴ・リベラ（1886～1957）による「農村教師」で飾られているが、そう言えば、先行するインディオ小説『インディオ』の英語版 *They that reap*（1937）も、同芸術家による挿絵が施されていたことが想起される。「インディオ5家族以上働かせる農園の所有者はインディオに対し教育の機会を用意する義務があり、学校を建て自費で教師を雇わねばならなくなりました」（1部第14章）。この通達に加え、首都からの文部省査察官（inspector de la Secretaría de Educación Pública 1部第16章）や農業査察官（inspector agrario 2部第8章）の巡視も、同時代の緊張感を確実に伝える効果的な用語である。そしてインディオ側指導者と化した“大統領崇拜者”こと村の青年フェリペ（2部第3章他）も、旧秩序側の地主からすれば、危険極まりない存在である。不穏な状況が続く中、ついに農園で火災が発生し、農園主家族は、社会的転落を経験するに至る。

他方、文学的技法になじまず平板なりリズムが目立った同ジャンルの作品群にあって当該小説は、自然描写も豊富にして細密である。「平野を通過するのに時間がかかります。そしてやっと通り過ぎたと思うと山が立ちほだかり、鋭い岩場と険しい山道がずっと続きます。わたしは担いでいるインディオのあえぎ声から、今登っているところの高さがわかります。わたしの両側に松の木が続いています。」（1部第21章）／「樹木がかなり密生した葉陰で、奇妙な光景に驚いたヒメシャクケイが大きな声を上げて騒いでいる。そして暑い空気が漂う中、ひんやりした、香りのよい風がさっと吹き抜けた。」（2部第10章）／「ちょっとした物音で逃げまどうたくさんの鳥の羽ばたく森の茂み。足音を立てずに近づき、素早く爪で捕まえる、どう猛な目をした森の茂み。」（同第16章）などが代表例であるが、「荷物を運ぶ動物は地盤の緩い斜面を転げ落ち、ひづめが耳障りな、乾いた音を立て急斜面に線を引きます。」（1部第21章）は、名文（名訳）の一端であろう。また、農園主を陥れかねない管理人の狡猾さ、農園主間の諍い（2部第1章）、インディオの痛飲（1部第10、14章他）・腹黒さ（2部第15章）などセサルを取り巻く人物群の造型も肉厚であり、近代医学と併置される呪術師（brujo）の言動（2部第13章他）は、滑稽・奇抜の代表的類型として登場する。

加えて、ペルーのホセ・マリア・アルゲダス（1911～1969）の『ヤワル・フィエスタ（血の祭り）』（1940、杉山晃訳現代企画室1998）や『深い川』（1954、杉山晃訳現代企画室1993）そしてエクアドルのホルヘ・イカサ（1906～78）『ワシブング』（1934、伊藤武好訳朝日新聞社1974）のような南米アンデス作品さらにはロペス・イ・フエンテス『土地』（1932）や『インディオ』とは異なり、カトリック聖職者が農園主や公権力（行政首長／判事）と癒着して先住民側の利益を損なう図式に参画する姿は見受けられず、農園主の病弱な後継者（長男マリオ）を前に、“初聖体を受けさせる”ように要望する（3部第9章）一般的な神父像が呈示されるばかりで

ある。

本作品は、作者の幼少期を投影したすぐれて自伝的な小説であり、大地主の家族が、「メキシコ革命」＝農地改革という時代の波に翻弄される生き様は、セサル・カステリャノスとその家族の言わば“実録史”に相当する。最後にファン・ルルフォ（1918～86）『燃える平原』(*Llano en llamas* 1953, 杉山晃訳水声社 1990) やエルミロ・アブレウ・ゴメス（1894～1971）『カネック』(*Canek* 1944, 金沢かずみ訳行路社 1992) そしてホセ・ルベン・ロメロ（1890～1952）『ピト・ペレスの自墮落な人生』(*La vida inútil de Pito Pérez* 1938, 片倉充造訳行路社 2000) などメキシコ近・現代文学の名作（翻訳）が徐々に整備されつつある昨今、幼時より地方生活に親近感を覚え、一家が零落してもなおインディオとの絆を深め、その教育や生活改善に尽力し続けた作者ロサリオ・カステリャノスによる、さらに円熟した小説作品『シウダー・レアル』（1960）や『真夜中の祈り』（1962）の邦訳刊行がますます待望されるところである。本作品を粘り強く良書に仕上げた訳者の力量なら、それも可能であるはずだ。

